

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520856

研究課題名(和文)「登呂モデル」を活用・応用した日本列島初期農耕文化の復元的・比較考古学的研究

研究課題名(英文) Restoration and comparative archaeological study in the Japan early stage agriculture which utilized "Toro model"

研究代表者

篠原 和大 (SHINOHARA, KAZUHIRO)

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：30262067

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：弥生時代の農耕集落として著名な登呂遺跡の復元された環境を活用しながら、弥生時代の木製農耕具を生産し、それを用いて水田を経営していく生業のありかたを具体的に復元することを試みた。それをもとに、静岡・清水平野の事例から「登呂モデル」として3つの農耕の生産システムのモデルを考え、その変遷過程を農耕形成のプロセスとして検討した。また、このモデルをもとに列島の諸地域との比較を行った。

研究成果の概要(英文)：Utilizing the restored environment in Ruins of Toro prominent as a farming colony of the Yayoi period, I produced a wooden agriculture tool and managed rice paddy using that specifically. That, and models of a production system of 3 agricultural stages was considered as "Toro model" from a case in Shizuoka and clear water plains and its change process was considered as a process of agriculture formation. This model was compared with other regions.

研究分野：考古学

キーワード：登呂遺跡 登呂モデル 初期農耕 復元水田 栽培実験 木製農耕具 実験考古学 比較考古学

1. 研究開始当初の背景

弥生時代の農耕の実態の解明については、導入された水田耕作の完成度や生産性、畑作や他の生業との複合などをめぐって、その評価が必ずしも定まっていなかった。そのような中、登呂遺跡は集落と水田域が一体となつてほぼその全容が明らかにされた遺跡として、古くから弥生時代の農耕経営の具体像を示すモデルとなつてきた(杉原荘介 1968「登呂遺跡水田址の復元」『案山子』、安藤広道 1992「弥生時代水田の立地と面積」『史学』62-1・2 など)。筆者は、近年、再調査に基づき弥生時代の状況に近い形で再整備が行われた登呂遺跡を活用して、一定条件下での水稲栽培実験を行うことなどによる、農耕社会の復元的研究を実施した(「登呂遺跡を活用した日本列島初期農耕文化の復元的研究」平成 21～23 年度基盤研究(C))。その成果は、実際の鉄器普及段階の弥生遺跡における農耕の実態を多岐にわたって推定し得た点にあるが、こうした弥生集落の農耕の一般モデルとして「登呂モデル」を検討した。登呂遺跡を活用した復元的研究は、実物大の諸環境の中で、さまざまなシミュレーションを行うことが可能であり、多くの研究展開の可能性を有している。

弥生時代段階の水稲耕作の一定の生産性についてもこうした研究から推定されるところであり、むしろ道具の生産をいかに集約的に行い、労働力を編成してどれだけ耕地を開発、経営し得たかが、生産力を推定する上での重要な課題であることもわかってきた。列島の広い範囲で弥生中期までの集団構造が弥生後期の鉄器の普及により大きな変容を生じることがわかってきているが(松木武彦 2007『日本列島の戦争と初期国家形成』、村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄生産』など)、弥生石器を木器加工などの利器として用いる生産システム(静岡清水平野の弥生中期有東遺跡段階=「有東モデル」と鉄器普及後の生産システム(登呂遺跡段階=狭義の「登呂モデル」)をモデル化して比較していくことは極めて有意であると考えられた。

また、灌漑水田耕作を基盤とした農耕文化の「定着」に先行して、稲作や農耕に関する情報の「波及」があることが示されてきたが(中山誠二 1999「日本列島における稲作の受容」『食糧生産社会の考古学』)、筆者の近年の研究では、静岡市丸子地区でこうした農耕の「導入期」とみられる畠状遺構を検出し、分散的な小規模集団が小規模な水田や畠を経営する本格的な木製農具生産以前の生業システム(「丸子」モデル)が存在することを明らかにした(「日本列島中部地域における農耕の成立過程の研究」平成 18～20 年度基盤研究(C)、篠原編 2011『手越向山遺跡の研究』)。

このように、静岡清水平野の弥生遺跡の動態(篠原 2008「静岡・清水平野における弥生遺跡の分布と展開」『静岡県考古学研究』

40)を事例として「農耕形成のプロセス」という視点からみると、「丸子モデル」「有東モデル」「登呂モデル」とした段階的な生産システムの変遷を読み取ることが可能であると考えられた。

本研究は、このような農耕の導入・定着・展開というプロセスの各段階を静岡清水平野の事例からモデル化し、登呂遺跡を活用した復元的な方法で検証していこうとするものである。こうした農耕形成のプロセスは、国内外の事例と比較して普遍化できる要素を持つと考えられる一方、そうした比較によってまた各々の事例の個別性、地域性を追究しようと考えられた。

本研究の特色は、史跡公園として整備された登呂遺跡を研究目的で活用する点にある。登呂遺跡は水田とそれを経営する一つの弥生村落の姿として評価されてきたが、再調査と整備によって、復元水田や集落はより弥生時代当時の形状に近い形に復元され、弥生農耕実態復元の一級資料としてその評価と価値はさらに高まった。運営者(静岡市)との協力によって通常の研究環境では得難い、弥生時代当時の物質環境を前提とした実験が可能である。こうした環境下では、考古学の多くの研究が「遺されたモノ」としての遺跡・遺構・遺物を対象としてその形態の研究にとどまらざるを得ない課題を有しているのに対して、高い時間的・空間的な再現性を容易に確保できることから、物質資料の機能・用途の検討から人間を介在した資料相互の関係性および社会システムに至る諸問題を比較的容易に検討することが可能になる。こうした研究は、現在の社会資本で整備された環境を有意に活用して社会に還元する点でも重要な意味を持つと考えられる。このような現在の登呂遺跡の調査研究および管理・普及活動における経験・情報の蓄積を引き継ぎつつ、再整備された施設を利用して具体的復元をなすのが本研究の最大の特色であり、独創的な点である。

したがって、本研究によって、これまで議論されてきた弥生農耕の諸属性について、これまでほとんどなかった実際の農耕実験に基づく具体的な数字やデータをもとに検証することが可能になり、より蓋然性の高い弥生農耕の実態に関する研究の実践が可能になる。また、結果として描かれる各段階のモデルは、列島内外各地の農耕文化形成に関する研究に極めて重要な具体的比較材料を提供することになる。このほか、実験考古学的な遺跡の活用、史跡整備事業の学術的な意義の追及など多方面への成果の波及が期待された。

2. 研究の目的

本研究では、筆者が実験考古学的方法を用いて、これまでに明らかにしつつある静岡清水平野における初期農耕形成モデル(「登呂モデル」)を「農耕社会の生産システ

ム」および「農耕形成のプロセス」という視点からさらに具体化、立体化する。こうしたモデルと国内外の(水稲)農耕形成にかかわる資料とを比較考古学的な視点から検討し、農耕形成プロセスの普遍性ととも各地の個性や地域性を追求する。以上の2点を主要な目的とした。

本研究の研究の前提として、登呂遺跡再調査の成果(静岡市教育委員会 2006『特別史跡登呂遺跡再発掘調査報告書』)をはじめとした静岡清水平野の諸弥生遺跡の調査成果があり、筆者の地域的な農耕形成に関する研究(篠原掲)と3年間にわたる登呂遺跡復元水田での栽培実験の実績(前記科研費)があった。本研究では、復元水田での栽培実験などを継続させながら、新たに設定した各段階での「生産システム」の追究を行うことを主眼とした。まず、登呂遺跡を活用した実験考古学による復元的研究を実施し、以下の視角から検討することとした。

(1) 研究期間の3年間にわたって、登呂遺跡復元水田での栽培実験を実施する。これまでの実験では、主として水田の生産性を念頭に置いて条件設定をし、検討してきたが、今回は農耕具を中心とする物質文化と労働編成がどのように生産や開墾・経営面積にかかわるかという点を中心に検討する。

(2)(1)の達成のために必要な道具類を当時の規格・素材で作成し、栽培実験の中で使用してその機能・用途を検討するとともに実際の作業の中での人間の行動と各道具類との関係性を追究する。道具類の復元は、弥生石器を用いた道具製作体系と鉄器を用いた道具製作体系の2パターンを念頭に置く。

(3) 上記に加えて、手越向山遺跡で検出した畠状遺構と打製石斧による耕作をモデルとして諸事例との比較検討を行う。

すでに、登呂遺跡の復元水田を利用して、毎年通年的な水田管理を再現する体制はできており、これをめぐって「登呂モデル」として弥生農村の経営の一つの姿を検討することが可能であると考えられた。本研究では、主に上記視角からの実験を通して、これを農耕の導入 定着 展開という3つのプロセス(「丸子モデル」「有東モデル」「登呂モデル」)に分けてそれぞれモデルの検討を行うことをひとつの目的とした。

さらに、こうしたプロセスは、日本列島内外の農耕形成期においてある程度の普遍性と相対性を持つと考えられ、上記実験的検討と並行して農耕形成期資料に関する情報収集を行い、研究の取りまとめと評価に結び付けることとした。

3. 研究の方法

上記の目的を持って本研究を実施したが、その方法は、(1) 弥生時代農耕具・工具の考古資料を点検し、それをもとに逐次復元製作を行う、(2) 研究期間の3年にわたって登呂遺跡復元水田で製作した道具の使用を含め

た栽培実験を行い、その成果を多角的に検討する、(3)「農耕形成のシステムとプロセス」という視点から(2)の結果と静岡清水平野の農耕形成期資料との比較検討を行い、「丸子モデル」「有東モデル」「登呂モデル」とした段階的な生産システムの変遷を検討する、(4)(3)の結果と列島各地の農耕形成期資料を対象として比較考古学的な検討を行う、というものである。以下に具体的内容経過を記す。

(1) 弥生時代農耕具の点検と復元製作

主に静岡清水平野周辺地域で出土している弥生時代農耕具の素材・形態および組成を検討し、実験に使用する農耕具を選定し逐次復元を行うこととした。なお、使用する木材は主に登呂遺跡公園の現在までの運営の中で確保できているものを使用した。

実験に使用する農耕具は、参照すべきデータをもとに現在の電動工具等を用いて製作したが、用途や強度などにかかわると思われる製品の木取りなどは出土品と同じになるように、矢などを用いて分割した材を素材として用いた。これら復元については、当初から十分に行うことは困難であり最終年度までに一定の完成を目指すこととした。

(2) 登呂遺跡復元水田での栽培実験および道具使用実験

平成23年度までの栽培実験の実績をもとに、登呂遺跡復元水田を利用してイネの栽培実験を実施し、必要な記録・分析を行った。また、復元し得た農耕具類を利用して栽培実験の過程で使用実験を行い、その用途・機能、現代農耕具等と比較した作業効率などを検討した。

(3) 静岡清水平野における「登呂モデル」の適用の検討

「農耕形成のシステムとプロセス」という視点から(1)・(2)の過程と結果を参考にしながら、実際の静岡清水平野の農耕形成期資料との比較検討を行い、おもに弥生石器を用いた弥生中期の生産システムのモデル(「有東モデル」)および鉄器を用いた弥生後期の生産システムのモデル(「登呂モデル」)さらにそれら以前の農耕導入段階の「丸子モデル」の構築を検討し、「丸子モデル」「有東モデル」「登呂モデル」とした段階的な生産システムの変遷を検討する。このような過程を経て静岡清水平野の農耕の形成過程のモデル(篠原 2008 などで構想してきた)を点検・再構築する。

(4)「登呂モデル」の比較検討

(3)で描かれる「登呂モデル」の各段階のモデルと各地の遺跡資料とを比較し、「登呂モデル」の普遍性を検討するとともに相対化をはかり、「農耕形成のシステムとプロセス」の一事例としての「登呂モデル」の叙述を試みる。

なお、(3)・(4)の過程で以下に示す遺跡やその資料、博物館等を訪れ、資料の見学・収集、比較検討などを行った。

【平成 24 年度】

静岡市鷹ノ道遺跡、一丁田遺跡、佐渡遺跡・宗小路遺跡（出土資料の検討）、静岡市文化財センター、藤枝市寺家前遺跡、浜松市松東遺跡（銅鐙紐出土）、沼津市文化財センター、沼津市西通北遺跡（中期環濠集落資料）、京都大学総合博物館、山梨県早川町歴史民俗資料館（焼畑の検討）、鳥取大学乾燥地研究センター（砂地掘削実験）、青谷上寺地遺跡、松本市立考古博物館、愛知県豊橋市瓜郷遺跡、西側北遺跡、秋田県立博物館、地蔵田 B 遺跡

【平成 25 年度】

宮崎県立西都原考古博物館、福岡県甘木市甘木歴史資料館・平塚川添遺跡、福岡市板付遺跡、佐賀県吉野ヶ里遺跡、宮崎大学農学部附属農業博物館、三重県斎宮博物館、松阪市文化財センター、鈴鹿市考古博物館、愛知県一宮市博物館、見晴台考古資料館、長野県飯田市考古資料館、阿島遺跡、寺所遺跡、井戸下遺跡

【平成 26 年度】

静岡市午王堂山遺跡、静岡市汐入遺跡、小黒遺跡資料、愛媛県愛媛大学ミュージアム、文京遺跡資料、奈良県橿原考古学研究所（御所市秋津遺跡水田土壌の検討）、北海道千歳市美々貝塚北遺跡（畠状遺構の検討）

4. 研究成果

前項の 4 点の実験や分析を基軸に研究を進めた結果、現時点で以下に述べるような成果を得ることができた。

（1）弥生時代農耕具の点検と復元製作

まず、静岡県下の弥生遺跡から出土している木製農耕具類について『木の考古学』（伊東隆夫・山田昌久編 2012）のデータベースなどを参考に集成し、主に静岡清水平野および浜松平野周辺地域において「鍬」とされる農耕具の素材・形態および形式組成を検討した。この中から主体をなすとみられる形式を選定し、必要に応じて同一形式の複数の実測図を用いて復元のもととなる復元図を作成した。最終的に復元の対象となったのは以下のような資料である（形式名は一般的な呼称にならう）。

静岡清水平野（形式名・遺跡名・復元点数）

直柄狭鍬（側刃鍬）・長崎・3 点

直柄広鍬泥除付・長崎・1 点

直柄広鍬・登呂・1 点

直柄又鍬・登呂・3 点

直柄小型鍬・有東・2 点

曲柄又鍬・登呂・1 点

曲柄又鍬・長崎・1 点

曲柄二又鍬・長崎・1 点

曲柄・登呂ほか

直柄・長崎ほか

エブリ・小黒・1 点

鎌・有東・1 点

浜松平野

直柄広鍬・角江・1 点

曲柄平鍬・角江・2 種各 1 点

先述のように鍬先に用いた樫材は登呂遺跡公園で確保できているものを使用したが、直柄および曲柄の材は、別入手したヤブツバキ材を用いた。木取は出土品と同様になるように、樫材は割り材を用いた。広鍬の一部は出土品と同様の割り材の幅が確保できなかったため、一定割合で縮小して製作した。実験に使用する農耕具は、参照すべきデータをもとに現在の電動工具（主にグラインダーに木工用切削刃もしくはサンディングディスクを装着したもの）等を用いて製作したが、特に樫材の加工にはかなりの労力と時間を要した。予定通り最終年度までに前記した復元品を完成させたが、使用実験を行えたものは限られる。特に曲柄については柄との緊縛の素材が出土品の同定データを参考にしたもの当初十分な強度を持つものが得られず、ほぼ使用実験はできなかった。

以上の製作実験を通して、素材の加工上の特性や強度、電動工具を用いたものの一定の加工にかかる労力、技術などに関する知見が得られた。今後の加工具なども復元した製作実験等において有用なデータになると考えられる。

（2）登呂遺跡復元水田での栽培実験および道具使用実験

栽培実験

本研究以前の栽培実験の実績をもとに、登呂遺跡復元水田を利用してイネの栽培実験を実施し、必要な記録・分析を行った。

栽培実験は、登呂遺跡の復元水田の一角に小区画を再現した地点のうち B 区と C 区と呼んだ地点を利用して B 区にうるち米（水稲：あいちのかほり）、C 区に赤米（登呂遺跡で古代米として栽培されてきたもの）の品種を栽培した。それぞれ一般的な田植え法で栽培し、B 区で収穫の際に残好を回収する地点と残す地点を設定して、プラント・オパールの蓄積の差をみることにした。また C 区では、赤米を用いて、植え付けの間隔を変えた田植えを行い、生育を観察した。

収穫は区画ごとに一定の割合で 1 m 四方の区画を設けて、株ごとに収穫して計量する地点を設け、他は区画ごとに収穫して天日干した。後者はかなりの割合で鳥害に合うケースがあった。

C 区の一定面積では、本研究期間以前から植え付けの条間を 20cm に固定し、条内の間隔を 10cm、20cm、30cm に設定して赤米の栽培を継続した。引き続きこれらの条件の間で収量（重量）の間に有意な差はないような結果が得られているが、さらに選別したところ、間隔が 10cm では不稔の割合が多いことがわかった。

収穫量については、C 区赤米栽培では、以前単位面積当たり、籾重量でおおむね 240 ~ 300g/m²（玄米重量で 180 ~ 240g/m²ほどか）とした収量はほぼ変わりなく、B 区のうるち米ではさらに収量が増える場合がある。古代の文献記録などから推定されている収穫量

は、このさらに半分以下の場合が多く、弥生時代に推定されてきた収穫量に比べれば、極めて高い値といえる。土壌や水環境が復元水田では好条件であることや使用している品種自体が多収種である可能性が考えられる。

C区では除草をしない区画を設けているが、年々雑草が増え収穫が落ちている。逆に除草を続けていると、雑草の生育量が年次ごとに減少していくことがわかる。

実験水田の管理作業は、職務の合間に行い、学生の補助も限られるため、そうした作業に地点的な差ができることはままある。こうしたことから経験的にわかることは、田起こしや代掻きの内容がイネの生育や雑草の生え具合に影響し、除草の成否が収穫に影響するなど管理をいかに適切に行うかが収穫に影響するという点である。

道具使用実験

前述のように、水田を管理する道具類は市販の鉄製のものなどを用いているが、研究期間の3年目には(1)で制作した復元木製農具の一部を実際の作りに用いることができた。また、同期間には作付していなかった区画を用いて田起こし、代掻き、畦塗りなどの作業を行う実験も実施した。以下今回確認しえた所見のいくつかを挙げておく。

現在、栽培実験では田起こしを市販の又鋤を用いて行っているが、制作した直柄又鋤はこれと同じように使用することができた。市販品と比較して自重が軽くやや貫通力に欠けるが、同じように使用すると掘り返しがやや浅くなる。民俗例の同種の道具の着柄角度が、この直柄又鋤の着柄角度とよく一致することも指摘できた。

「泥除」を装着した直柄広鋤は、田起こし後に水を張った田の土塊を崩して代掻きの準備をする作業に適していることがわかった。「泥除」を装着しない場合と明らかに泥水のハネ具合は異なる。長時間継続して作業を行う場合効果的であると思われる。

狭鋤(側刃鋤)は畦塗りのような泥を塗りつけるような作業には適していると思われる。刃のついた側縁を押し付けて伸ばすように用いることができ、鋭角につけても逆につけても体の姿勢によっては使いやすいことがある。出土品の刃部の磨耗状況も刈払い具とするよりは説明しやすいように思える。

以上のように、復元農具と「想定される作業」の間で使用実験を行うことによって、その適正を探ることができ、機能・用途の問題にアプローチすることができるが、それを証明することは依然難しい。これに対して、想定される作業を民俗誌や文献資料なども参照しながら増やして、体系的な作業リストを作り、想定しうる限りの復元農具でそれを検証する使用実験を行っていくことで、次第に当時の農作業の実態や体系に迫っていくことが可能と推定される。道具の製作・使用実験はまだ途上にあるが、さらなる実験考古学的な研究の見通しが得られつつある点



図1 復元した農具と使用実験の様子

が、本研究の成果といえる。

(3)「登呂モデル」とその適用の検討

農耕形成モデルとしての「登呂モデル」

(1)・(2)の過程と結果を参考にしながら、実際の静岡清水平野の弥生時代(農耕形成期)資料との比較検討や遺跡の立地・形態・分布のあり方とその変遷との照らし合わせを行うと、先述のように、農耕導入段階の「丸子モデル」おもに弥生石器を用いた弥生中期の生産システムの「有東モデル」鉄器を用いた弥生後期の生産システムの「登呂モデル」への段階的な生産システムの変遷をモデル化することができる。このモデルは(1)・(2)の研究を深化させ道具生産のシステムや食糧生産のシステムを素材とその加工のプロセスや人間集団と労働といった視点から具体的な説明を加えていくことによって、より具体的なものとする事ができる。以下、本研究での上記3つのモデルの検討過程について述べる。

「丸子モデル」

灌漑水田耕作を基盤とした農耕文化の「定着」に先行して、稲作や農耕に関する情報の「波及」があることが示されてきたが(中山誠二 1999「日本列島における稲作の受容」『食糧生産社会の考古学』)、筆者は本研究以前に、静岡市丸子地区でこうした農耕の「導入期」とみられる畠状遺構を検出し、分散的な小規模集団が小規模な水田や畠を経営する本格的な木製農具生産以前の生業システム(「丸子モデル」)が存在することを明らかにした(篠原編 2011『手越向山遺跡の研究』ほか)。当モデルは静岡清水平野の土器編年で弥生期~a期頃までに相当する。本研究では、2012年にこのテーマに関する研究会を開催し、この段階の畠遺構の可能性とこの段階の生業モデルが近年「園耕段階」や「農耕文化複合」(設楽博己 2009「食糧生産の本格化と食糧獲得技術の伝統」『弥生時代の考古学5』など)と呼ばれる段階の一部にあたることと考えられることを示唆した(発表)。この研究会では近年レプリカ法などを用いて急速に発達しつつある先史時代の植物利用の状況把握や耕作地の新発見などについて研究者と意見交換できた。その後、関係す

る資料の検討報告を行ったほか(論文)、
畠遺構については静岡市鷹ノ道遺跡でその
可能性のある遺構の検出に接し、さらに事
例を加えて、この種の遺構の普遍性につ
いての検討を行うことができた(論文)。

「有東モデル」

弥生石器を木器加工などの利器として用
いる生産システム(静岡清水平野の弥生中
期有東遺跡段階)で、静岡清水平野の土器
編年の弥生 b 期～ 期に相当する。有東
遺跡など該期の主要遺跡では比較的大規模
な集落を形成し、未製品を含めた大陸系磨
製石斧類が大量に出土し、木製農具類の未
製品も出土することから、石器を作り木の
資材や道具が生産されたことがわかる。こ
れらの作業は集落内部でそれぞれ集約的
に行われ、そのような集落内完結的な集約的
労働とその多様さがまた、集落を大規模・
独立的にしたものと推定される。こうした
推定は(1)の製作実験から石器による木
器加工を相対化することによっても補強さ
れる。方形周溝墓を盛んに構築し葬送祭祀
によって集落の結束を図るあり方もこのよ
うな生産形態と密に関係すると考えられた。
こうした集落の資材や生産域獲得のための
領域の問題や集落間の関係についても言及
した(論文、発表)。

「登呂モデル」

鉄器普及後の生産システム(登呂遺跡段
階)で、静岡清水平野の土器編年の弥生
期以降に相当する。木材の伐採・加工には、
加工痕跡からも鉄器が使われるようになった
と考えられ、石器生産の終焉と鉄器による
木材利用効率の飛躍的向上が、道具生産へ
の労働力の配分を減少させ、開発や生産へ
の労働力の投下増大を可能としたと推定し
た。結果、集落を分散的に新営して、新た
な耕地を広げていくような集落展開がみら
れ、地域的な農業共同体の形成が推定でき
る(論文、発表)。本研究の実験成果を
最も反映し易いモデルである。

列島農耕形成期の中での「登呂モデル」

各地の農耕形成期遺跡との比較検討結果
については十分な成果が示せていないが、
「登呂モデル」が普遍化できる部分と比較
相対化することによってまた別のモデルが
考えられる地域や段階があることが指摘し
うる。静岡清水平野は、ある程度典型的な
扇状地地形として形成されており、その形
成プロセスが、「登呂モデル」とした農耕形
成過程とも深くかかわっていることが指摘
できる。また、このことは当該地域の初期
農耕が、次第に水稻耕作に関連する生業の
比重を高める方向で展開したと考えられる
こととも関係する。このような視点からい
くつかの沖積平野に展開する遺跡群との比
較とモデルの適応は比較的行いやすい。一
方、扇状地形が発達しない平野部や山間部
などの遺跡群ではまた別の複合的なモデル
が考えられる場合が想定された。

(4) 総括

本研究の成果として、登呂遺跡をモデルと
し、また活用する復元的な研究にかなりの進
展がみられたということが出来る。これをさ
らに進めて立体的な初期農耕社会像を再現
的に復元していくには、さらに実験考古学的
な視点からの分析が必要であると考えられ
る。本研究の蓄積をさらに活用しつつ分析を
進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計4件)

篠原和太、駿河における弥生時代後期から
古墳時代初頭の集落の様相、駿河における古
墳時代前期集落の再検討、静岡県考古学会、
査読無、2015年、5-12

篠原和太、駿河・伊豆地域における古墳時
代の石材利用、静岡県埋蔵文化財調査報告書
第66集、査読無、2015年、30-35

篠原和太、鷹ノ道遺跡の小溝群(SX801)と
弥生中期以前の畠状遺構、鷹ノ道遺跡第14
次発掘調査報告書、静岡市埋蔵文化財調査報
告、査読無、2014年、84-89

篠原和太・中原康介・古澤尚之、佐渡山周
辺の考古資料 - セイゾウ山遺跡、宗小路遺跡
出土資料の整理 -、静岡大学人文社会科学部
考古学研究室調査研究集報 2012、査読無、
2013年、3-16

[学会発表](計3件)

篠原和太、駿河における弥生時代後期から
古墳時代初頭の集落の様相、静岡県考古学会
2014年度シンポジウム「駿河における古墳時
代前期集落の再検討」、静岡県考古学会、2015
年2月28日、静岡市登呂博物館、静岡県静岡
市

篠原和太、菊川式土器の拡散と定着、山梨
弥生文化研究会、2013年8月10日、帝京大
学山梨文化財研究所、山梨県笛吹市

篠原和太、静岡清水平野の事例から見た条
痕文期の農耕、縄文/弥生移行期の植物資料
と農耕関連資料、考古学研究会東海例会、
2012年8月4日、静岡大学、静岡県静岡市

[その他]

ホームページ等

<http://www.ipc.shizuoka.ac.jp/~jsksino/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

篠原 和太 (SHINOHARA KAZUHIRO)

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：30262067